



イタルダイnfォメーション

ITARDA INFORMATION

2012年 特別号 春

<http://www.itarda.or.jp>

子供を交通事故から守ろう

はじめに

交通事故による子供の死傷者数は、過去10年間の推移を見ると減少傾向にあります。平成22年中の交通事故による高校生以下の子供の交通事故死傷者数は92,376人でした。（図1参照）10年前に比べ約3万7千人減少しています。しかしまだ9万人を超える子供達が交通事故の犠牲になっており、少子高齢化社会の進展により子供の人口が減少する中、次代を担う子供たちを交通事故から守ることの重要性はより一層高まっています。子供の事故を学齢別に傾向と特徴を分析し、対応を考えてみたいと思います。

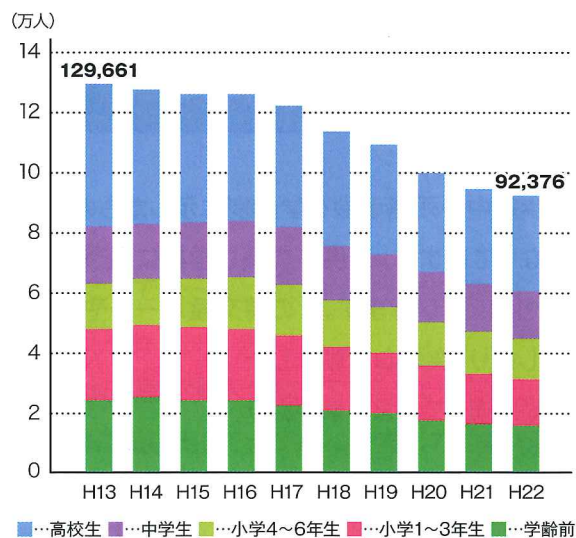


図1 学齢別死傷者数推移（1+2+3当）（H13年～H22）

当センターは、交通事故と「人間」「道路」「車両」について、科学的・総合的な調査・分析や研究をおこなって交通事故の防止と被害の軽減を図り、快適な道路交通環境の実現に寄与することを目的に設立されました。

つくば市には交通事故総合分析センターの「交通事故調査事務所」があります。つくば事務所では、実際の事故現場で事故の状況を調査していますが、この事故調査は交通事故の低減を目的とした調査・研究のためのもので、警察の捜査や保険会社の調査とは全く別のものです。



調査中の事故調査員



公益財団法人

交通事故総合分析センター

Institute for Traffic Accident Research and Data Analysis

小学校入学前の幼児は、自動車同乗中の死傷が多い

図2は、H22年中の自動車乗車中・学齢別死傷者数を表しています。入学前の幼児は、親と一緒に居る事が多いので、車に同乗中に事故に遭って死傷することが多くなっています。子供を車に乗せる時は、安全運転はもちろんですが、必ず身体にあったチャイルドシート、シートベルトを着用させることを心がけましょう。これにより急ブレーキ操作等により椅子から放り出され怪我をする等の車内事故も防げます。

面倒くささらず、子供が嫌がったとしてもチャイルドシートやシートベルトをする習慣を身に付けさせる事が大切だと思います。

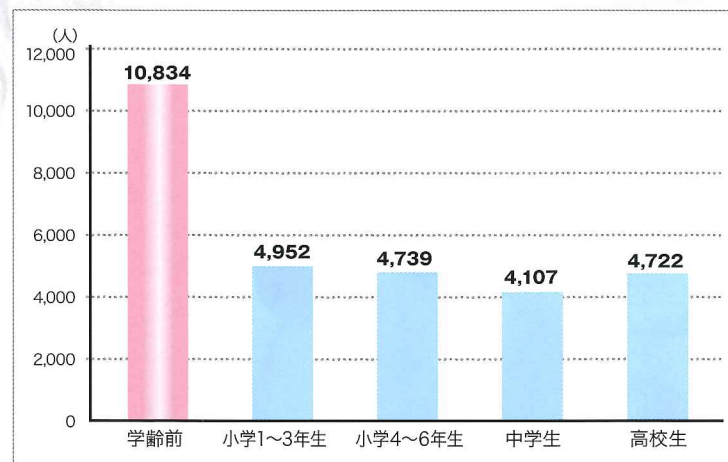


図2 自動車乗車中・学齢別死傷者数(1+2+3当)(H22)

高校生は自転車乗用中に多く死傷している

図4は自転車乗用中死傷者数(1+2+3当)を学齢別に表したグラフです。これを見ると中学生から高校生にかけ死傷者が増えています。年齢が上がるほど、自転車に乗る機会も増え、また体力もついてスピードも出せるようになるのですが、車両として安全に乗るルールやマナー等を十分理解せず、危険な運転をすることで事故に遭い易くなるものと思われます。中学から高校にかけての年代は自転車の安全教育が最も重要でかつ効果が上がる時期と考えられます。保護者の方は自転車を買い与える前に、自転車講習会などの研修に積極的に参加させてください。



図4 自転車乗用中・学齢別死傷者数(1+2+3当)(H22年)

歩行中事故は小学1年生から3年生に多い

図3は歩行中の死傷者数を学齢別に示したものです。歩行中の死傷者は小学校低学年(1年～3年)が最も多くなっています。子供が成長し学校に通うようになり、親から離れ、子供達だけとか1人で歩くなどの機会も増えていきます。その時交通ルールやどこにどんな危険が潜んでいるかなども分からず道路に飛び出したり、突飛な行動をしたりして事故に遭ってしまう事があります。

運転者は道を歩いている小学生を見かけたら、十分すぎる位注意を払うことが大事です。また保護者を含めた周りの人たちは、安全に通行できるように、粘り強く指導して行く必要があります。



図3 歩行中学齢別死傷者数(1+2+3当)(H22)

事故事例の紹介

各学齢別に事故の特徴と傾向を分析しましたが、ここでは一例として小学生が下校途中に飛出して事故に遭った事例を紹介します。

小学校の下校時間帯に起きた事故です。左側の歩道を小学生が集団下校していました。その内の一人の少女が、立ち止まったと思ったら突然車の直前に飛び出てきて車に衝突してしまいました。この事故で、その子は頭蓋骨を骨折し大脳と肝臓に重傷を負いました。道路反対側に猫がいるのを見つけ、駆け寄ろうと道路に飛び出したのが原因でした。

こういう事故を防止するには、子供に「道路に飛び出してはいけません」、「渡る時は左右を確認しましょう」等の安全行動をするように常日頃から、言い聞かせるようにしてください。

車を運転する方は、遠回りになっても子供のいる通学時間帯の通学路は、出来るだけ避ける方が良いでしょう。もしどうしても通行しなければならないのであれば、子供の行動に注意を払い、すぐに停止できるよう十分に速度を落として通行してください。

交通事故調査へのご協力をお願いいたします。

おわりに

学齢によって交通事故を起こし易い状態が異なっているのが判りました。その時々で学齢で起こし易い事故に対処できるように日頃から家庭・学校などで交通安全について話し合う機会を持つことが大切ではないでしょうか。

こうした日々の地道な教えや指導が子供を交通事故から守るのに効果が有ると思います。

自動車運転者は、子供の行動が予測し得ないものと理解して、どんなことにも対処できるように子供がいたら、身構えてください。また通学時間帯の通学路を通る事は、出来るだけ避けた方が賢明ではないでしょうか。



交通事故総合分析センターは、平成4年(1992年)に国家公安委員会、運輸省(当時)、建設省(当時)から設立許可を受けて、公益法人として設立されました。センターは、我が国で唯一道路交通法第6章の3の定める「交通事故調査分析センター」の指定を国家公安委員会から受けた調査研究機関であり、交通事故の防止と被害の軽減のための交通事故の調査分析を行っています。なお、センターは平成24年(2012年)4月に公益財団法人に移行しました。



交通事故総合分析センターの調査車両は緊急自動車に指定されています

お問合せ先

公益財団法人 交通事故総合分析センター

●ホームページ <http://www.itarda.or.jp> ●Eメール koho@itarda.or.jp

つくば交通事故調査事務所

〒305-0831
つくば市西大橋641-1 (財)日本自動車研究所内
TEL029-855-9021 / FAX029-855-9131

事務局

〒102-0083
東京都千代田区麹町6-6 麹町東急ビル5階
TEL03-3515-2525 / FAX03-3515-2519